

特集

看護過程 再再考

小誌 56 巻 7 号「看護過程再考」につづく特集です。

「看護過程」が看護の教育上、重要であるということ、そして同時にそれ自体が看護ではないことは、皆さんに共有された認識と言えるのではないのでしょうか。

現状では、ペーパーペイシェントでの演習、実習の計画・記録・評価など、看護教育の非常に多くの部分で看護過程が活用され、教育のなかで「看護過程」への比重が非常に高くなっています。これは、看護過程は看護教育の 1 つの側面でしかないという前提との、大きな離れなのではないかと考えます。

前回特集では、「看護過程」を補完するものとして、臨床判断モデルをご紹介しましたが、今特集では、前回の「看護過程をどう教えるか」の部分を受け継ぎ、より実地的な教育の観点から、「看護過程」の教育について、生のお声をお届けいたします。

「看護過程」をどう教えるか、の前に大きな問いとしてある、「看護過程」を用いて看護をどのように教えるか、再び考えていただく機会となれば幸いです。